

---

# タイムラグ

morita

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タイムラグ

### 【Nコード】

N6926G

### 【作者名】

m o r i t a

### 【あらすじ】

ニユース番組でよくある外国の生中継放送。外国の現場と日本のスタジオでは奇妙なズレが生じるのはなぜだろう。その疑問を抱いたときから自分自身にも不思議なズレが生じていく。

テレビでは外国で起こった山火事を生中継で放送していた。

日本のスタジオと、外国の現場で取材をしているリポーターとの会話にタイムラグが生じている。スタジオで司会者が問いかけると、リポーターはすこし遅れて話し始める。その言葉が司会者の言葉と重なり、非常に聞き取りにくい。

わたしは子供に問いかけてみた。

「どうして日本から話しかけるとタイムラグがあるのに、日本に届く言葉にはタイムラグがないのだろう」

「うーん？」

三才になる息子は必死に考えてくれているように見えた。だが夕飯のにおいが漂ってくると、妻のほうへ行ってしまった。

「子供相手に何を変なこと言っているの」

妻は笑いながらテーブルに今晚のおかずを並べている。

妻にも訊いてみたが、こちらは相槌を打っただけだった。

一カ月後、パソコンのネット環境を光に替えた。それと同時に家の電話もIP電話になった。これで電話代が少しは抑えることができるらしい。早速、兄のところに電話した。しかし、まったく会話にならない。こちらの音声が遅れて聞こえるようで「おい、聞いているのか」「ん？　なんだって？」と兄が言う。遅れたわたしの声と兄の声とが重なって、聞き取りにくいらしい。わたしの声だけにタイムラグが生じているのだ。まるで以前見た外国にいるリポーターとスタジオの司会者とのやりとりのようだった。

仕方がないので技術屋に見てもらった。

「もしかするとウイルスの所為かもしれません。一度、パソコンのリカバリをしたほうがよいでしょう」

技術屋が帰ったあと、リカバリを行い、妻にどこかに電話するよ

うに頼んだ。「普通だよ」と妻は言った。やはり、あの妙なタイムラグはウィルスの仕業だったようだ。

一年後、久しぶりに大学時代の同窓会に出席した。時間より少し早めに行き、受付で招待状を渡す。受付票には出席者の氏名が並んでおり、ほとんどの人が氏名の横にチェックが入っていた。みんなよっぽど楽しみにしているんだなと笑みがこぼれる。わたしも同じように自分の名前の横にチェックを入れようとペンを持つと、突然背後から声をかけられた。

「遅いよ。何してたんだよ」

「えっ」

振り返ると旧友が笑っていた。彼は少し顔が赤くなり、酔っているようだ。

「まあいいよ。久しぶりにお前と飲めるんだ。それくらいは大目に見てやるよ」

旧友の軽口を聞き流しながら、時間を間違えたのだろうかとしこし焦った。招待状に書いてあった時間に間に合うように来たつもりだったのだが。狐につままれたような気がしたが、せつかくの再会に水を差すのも悪いのでそのことにはもう触れなかった。

「いやあ、遅かったねえ。元気だった？」

昔の仲間たちが気軽に話しかけてくれる。わたしは再会を喜びながら、自分が時間を勘違いしていたのだろうと思った。

「それにしてもお前、昔と変わらないなあ。うらやましいよ。おれなんて、結婚したとたん、周りのみんなから老け込んだよなあって言われるんだぜ」

「きつと貫禄がついたんだよ。その腹とかな」

わたしがそう言うのと笑いが起こった。

「だよなあ。さすがにこの腹はやばいよなあ。三十を越えたばかりだったのに」

「でも、あなた本当に変わらないわねえ。今、キャンパスを歩いて

いても違和感ないわよ」

当時、ちよつと気になっていた女性からそう言われると、わたしは「そうかなあ」と空とぼけてみせ「君もきれいになったじゃないか」と褒めた。すると彼女はまんざらでもなさそうに顔を赤らめた。

わたしたち夫婦は息子が生まれたときに植えた桜の木を眺めていた。

「早いですねえ、年月がたつのは。この木を植えてすでに二十三年ですよ」

「そんなに経ったかなあ。まだ十年ほどのような気がするなあ」

「あら、やだ。まだぼける年じゃないですよ。あなた」

「ぼけてなどおらん」と言ってみたものの、以前から気にしていたタイムラグが、最近急速に進んでいるような気がしていた。わたしだけが年を取っていない。実際には五十を越える年だが、容貌も体力もまだ三十代で見られる。うれしいことではあるが、反面少し怖いところもあった。わたしだけが生中継先の世界にいるような気がするのだ。同じ時間を共に生きているはずの家族の中で、実はわたしだけが異なる世界に置いて行かれているのではないかと考えてしまう。

あの山火事のニュースから感じ始めたタイムラグが時間を経るに従い、徐々に大きくなっていた。カオス理論がわたしの体に深く刻まれているようだった。

そして、そのことはさらに年月が経つに連れて決定的になっていく。

わたしが生まれた年からちょうど百年たった。妻は先に逝き、わたしと同期の友人もみなこの世から去ってしまった。そして今、目の前にわたしよりも老けた息子がベッドで眠っている。もう話すことができな

い。今日がヤマです。息子さんはできる限り、一緒にいてあげてくだ

さい  
「

医者からそう言われ、わたしは長生きが決して幸せではないことを悟った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6926g/>

---

タイムラグ

2010年11月23日18時00分発行